

車で二十分ほど、いつもの散策路、吉備路風土記の丘県営南駐車場へ到着する。

正面の備中国分寺と五重の塔へ真つすぐに延びる田中の道を右に折れてしばらく歩くと、左手に「こうもり塚古墳」の開口部が、周囲の景からぽつかりと浮いたように見えてくる。横目に見ながら通り過ぎ、備中国分尼寺跡の松林へ。大小の礎石をたどりながら抜けると、丘の頂上の総社吉備路文化館に着き、一休みする。丘に佇つと柔らかなで清浄な空気が漂ってきて、心身共に解放され、遙かな遠い時代の吉備の国からの幽かな鼓動が伝わってくるようである。丘を



悠久の吉備国

木村ゆきこ



第57号

令和7年3月発行

下り「こうもり塚古墳」へ。石棺が安置されている玄室までの長い羨道の威圧感と迫力に、いつもおそおすと歩いてしまう。

この古墳に伝わる「黒日売」の伝説に、私はロマンチズムをかきたてられてきた。著名な歴史学者の「日本古代史の謎」によると、「文献に現れた吉備氏族の話の中で、史実的であると思われる最初の話は黒日売のものである。これは『古事記』の『仁徳記』の中に、旧辞的な歌謡物語として出ている」とあって、ふむふむと、また想像が広がってゆく。

しばらくして、積ん読の本の整理をしていると「西日本俳諧通史」岡本而立著（岡山県現代俳句協会副会長）という本がでてきた。その中の古代歌謡から和歌（大和奈良）の章の「古事記」下巻冒頭に、仁徳帝と黒日売の「相聞歌」の記述があった。

皇后の嫉みに耐えられず、吉備に逃げ帰った黒日売を追って海路吉備国に下り、妃に会われ

た仁徳帝は

「山懸に蒔ける松菜も吉備人と共にし採めば
楽しくもあるか」と詠まれている。

帝が還幸の時

「倭方に往くは誰が夫隠水の下よ延へつ、往くは誰が夫」

と妃の贈答があり、これは古来、「相聞歌」の圧巻とされているとあった。

桃や桜の咲く頃の吉備路散策は、春日をとろりとかき回すような心地よさ……。ふと黒日売も御出座しになるのでは……と足を止めてもみる。

しかし、こうもり塚古墳の主はいまだ古代史の謎につつまれているそうである。

岡山県現代俳句協会

第11回吟行会「吉備路」平成21年11月開催

平成の吉備人の吟行句

どんぐりの人懐こいのから落ちる 竹本 健司
人容れて古墳落はじまれり 花房八重子
紅葉寺われ善男として参る 天野 光暉
尼寺跡の少し遠くてくぬぎの実 稲田マシミ
小春日や礎石の真中ふくらみて 岸本 順子
黄落の表書院の岡山弁 國定 義明
塔よりもこうもり塚へ小春の日 小山 明子
櫓田を来ていきなりの古墳口 鈴木 文子
おやまあと茶屋の婆さん石路の花 難波 正夫
畦道の丸みを帯びて冬ぬくし 花房 典子
黒媛の手を振っており花芒 古川 澄子
悠久のロマンズつしり吉備小春 牧 美里
石路日和羨道ながきこうもり塚 木村ゆきこ

おかやま県民文化祭参加 第二十九回岡山県現代俳句協会俳句大会



開会挨拶（木村会長）

とき 令和六年十月十三日（日）
ところ 岡山県ゆうあいセンター

十月の澄んだ秋空のもと会員三十三名の参加により、ゆうあいセンター二階大会議室で開催される。

当日は例年より一週間早い大会日程となり、事前投句の締切りを忘れられた会員もおられる様で投句数二七四句、投句者五一名で八月十六日に投句が締切られた。その中で新会員のみならず会員外の投句もあり新しい息吹が感じられた。

大会当日には恒例となる席題句が会長、副会長より発表され、参加者はそれぞれ二句を投句。

定時となる十一時より木村ゆきこ会長から「今回は新会員も多く参加され、新しい風が吹き出しました。さらに「おかやま現代俳句会」では回を重ねるごとに皆様の屈託のない意見と研鑽が行われるようになって

います。本日も活発な意見を交わしお互いに有意義な一日を過ごしたいと思います」との開会の挨拶があった。

続いて俳句大会では、前田宏事務局長より大会の選句経過報告。秋岡宣子副会長、前田宏の司会で入選句の選評の後、活発な議論がおこなわれた。また、今回から中国地区各県会長様より特選句の句評も頂き、好評を博した。

昼食時間中に花房典子、万波照世幹事により席題句の清記がおこなわれ、互選、十三時三十分より土屋鋭喜事務局次長、小西瞬夏幹事の司会進行で午後の俳句大会が開かれた。

当日句会では全員が発言し、結社や句歴も様々な会員が耳を傾け和やかな会となった。

表彰式では入選句の披講の後、木村会長から賞状と副賞が授与され、句友から拍手が贈られた。

おかやま県民文化祭の参加事業として開催された俳句大会は佐野由魚副会長の挨拶で全日程を終了した。

（前田 宏）

第二十九回岡山県現代俳句大会受賞作品

【おかやま県民文化祭賞】

万緑の真つ只中をスイッチバック 三宅 章文

【岡山県知事賞】

両の手に孤独と自由雲の峰 松川 郁子

【岡山県議会議長賞】

夏椿弟の骨白すぎる 秋岡 宣子

【岡山県教育委員会教育長賞】

涼風や青い時間を使い切る 薄 和子

【岡山県現代俳句大会賞】

空蟬や処分ためらうチェロケース 永井麻紀子

足裏の左右の違い晩夏かな 畦田 恵子

秋茜端の揃わぬ横野和紙 小松原陽子

ふる里を捨てきれずいる鰯雲 片岡 陽子

青林橋半分濡れてゐる地球 橋本 幹夫

寛解の妻と潜りし茅の輪かな 宮下 哲朗

少女老いて九十ひとり缶ビール 佐野 由魚

湯たんぽや国債少し保有する 保田 紺屋

青春の欠けらの浮かぶソーダ水 中野 澄子

手火花やたしかめなほす吾が居場所 前田 宏

電波時計回りに止まぬ大暑かな 鈴木 文子

塗り直すアートの駅舎夏の雲 加藤 正枝

さわさわと山の風鳴る小鳥の死 天野 光暉
薬局の軒に干さるるみこしぐさ 難波 正夫

【中国地区現代俳句協会会長賞】

山口県現代俳句協会 久行保徳賞

銃眼のうつし世眩し蟬時雨 花房 典子

島根県現代俳句協会 月森遊子賞

ひたすらに手を合やす日々八月来 豊田 級衣

広島県現代俳句協会 川崎益太郎賞

水無月や水持て余す水の星 保田 紺屋

鳥取県現代俳句協会 稲垣規雄賞

夏椿水車のこぼす水の音 薄 和子

岡山県現代俳句協会 木村ゆきこ賞

敦盛草群れて線状降水帯 國富 柿方

席題句 主な作品

道長のこゑに濃くなる実紫 木村ゆきこ

じやんけんのやがて一人に秋夕焼 花房 典子

一步目は小幡で入る大花野 薄 和子

菊月の威風田中鏡獅子 國富 節子

この道を曲がれば故郷曼珠沙華 中上 久子

揺れるのはフレイルのせい稲そよぐ 黒瀬 琢葉

海鳥は眠りて島の十三夜

口ほどに利かぬ足腰十三夜

けもの等に影の生まれる十三夜

不揃いの棚田の謂れ月千個

マネキンを白布で包む後の月

十三夜竹田城趾へ登らばや

後の月ぬつと出てくる妻の耳

島中に曲がる途あり鳥威

前言をすぐ曲げし人そぞろ寒

むかご一個厨に落ちて見つからず

野の色や初老チームの曲がる球

にんまりと掬うてみせる今年米

老犬に歩調合わせて金木屋

蟬涙のとつとつ長し後の月

彼岸花彼岸にずれて稲に添う

田の水を供へ地蔵の十三夜

遠足のバスのバックの笛の音

昼飯のにぎりは白し稲を刈る

稲刈りや家族で喰う握り飯

焼芋の割って太きを母にやる

稲刈に遠き縁者も集りぬ

ひとり居の待つ人のなき十三夜

最寄駅から歩いて五分花野有り

垂れし穂に目立つ田稗や高齢化

里村の入り口見つめる案山子かな

橋本 幹夫
片岡 陽子
古川 麦子
倉見 雯匝
小西 瞬夏
國富 柿方
佐野 由魚
前田 宏
土屋 鋭喜
小西 邦子
高橋つらら
秋岡 宣子
小松原陽子
見手倉美砂子
阿部 真子
四宮 和美
藤原由美子
岩田 志乃
豊田 級衣
永井麻紀子
保田 紺屋
松川 郁子
三宅 章文
万波 照世
仲村 宗伯
目賀 紀子

第二十五回吟行会

岡山後楽園

橋本幹夫

とき 令和六年十一月四日(月)

ところ 岡山後楽園(岡山市)

定例の吟行会が、今年度は、日本三名園の一つ、岡山後楽園において開催された。

参加者は三十名、午前十時から園内鶴鳴館でそれぞれ受付を済ませ、三々五々園内探索に出



掛ける。

曆の上では立冬間近にもかかわらず、暑さ続きの今夏だったのか木々は漸く一部が紅葉めく程度だった。

令和の大改修を終えた金鳥城を仰ぎ雲一朵無き菊日和の天候に恵まれた。

折しも後楽園は、毎年恒

例、菊花大会開催期間中であり、園内には県内の菊愛好家が丹精込めて育てた華麗な大菊や可憐な小菊の作品が多数展示され、晩秋の後楽園に日本伝統の菊花の彩りが添えられていた。また、文化の日翌日の振替休日には「八羽の丹頂鶴の園内散策」行事も催され、国内外問わず、園は多くの観光客で賑わっていた。

十一時三十分の投句締切時間に合わせ句会場、鶴鳴館へと入る。

句友団欒のお弁当時間後、定刻十三時に句会が始まった。冒頭木村ゆきこ会長挨拶のあと、土屋鋭喜事務局次長、花房典子幹事司会進行の下、全六十出句に対し参加者の評や感想が出され、大いに盛り上がった。佐野由魚副会長の閉会挨拶をもって、句会を閉じた。楽しく、有意義な句友との一日だった。

主な作品

神帰月少し戸が開き能舞台

菰巻きの松のなにやら患者めく

小松原陽子

今田由律子



友好を果たして鶴は秋空へ
放鳥に迂回させらる小六月
秋天の鳥城の威光鶴の舞ひ
鶴唳や我が俗世を脱ぎ捨つる
前撮りの夫婦触るるや初紅葉
唯心や枯蓮まとふ水明かり
狭間より後楽園の秋覗く
能孚の背を探す晩秋能舞台
鯉の上を鯉のすぎゆく文化の日
借景は瓶井の塔や百舌鳥高音
啼きて舞ふ鶴を見上ぐる石の亀
秋の声開け放されて能舞台
名園や人を静かに歩ませて
放ち鶴の声に膨らむ菊あまた
リハーサル秋空に舞う鶴四羽
秋天や一群暗き蘇鉄畑
園内を蝶々と巡る小春かな
園の茶屋秋パフエ抹茶とジャズ之音
おほほ石唯心山より鶴の声
搦手に大き影あり冬の城
児のやうに背の順並べ菊の鉢
七五三だかれてねむる岡山城
丹頂の背に昼の風ひつかかる
やはらずに落ちぬばかりのひとしづく
菊日和心拍とこのう後楽園
井田のひこばえ稲や丈比べ
黄金の鯉の口先後楽園
茶畑にいま人の居ず神無月

右手 采遊
土屋 鋭喜
林 参祇
畦田 恵子
高橋つらら
小西 瞬夏
保田 紺屋
黒瀬 琢葉
四宮 和美
國富 節子
橋本 幹夫
薄 和子
楠戸 順子
鈴木 文子
青木 良太
久常 大軒
豊田 綴衣
万波 照世
木村ゆきこ
佐野 由魚
花房 典子
福島 翠夕
渡辺 貞子
山崎 妙子
國富 柿方
小坂 規生
倉見 雯匝
遠藤 哲平

私の感銘句

國富 節子 選

春耕や勝手に走る耕耘機

前田 宏

春のおとずれと共に始まる人間の営みの代表的なものの一つに春耕というなりわいがある。

少しの距離をおいて耕耘機の様子を見ている作者の待ちわびていた春の到来の喜びを耕耘機にたくしているようです。

泣きたくてもひとり夜の雪だるま 万波 照世

雪でいろいろな物を作つて楽しんだものです。仏の形も作つた事もある。

夜の雪はとけて消えて去るものである。作者の泣きたい気持ちも翌日には楽しい事がいつばいあつたにちがいないと私はそう思いました。

翡翠を待つ四阿の三時間

秋岡 宣子

翡翠が来ると聞いて庭園の四阿で双眼鏡を手にバードウォッチを楽しんでいらつしやる事でしょう。いつしか時はすぎ三時間に及んでいた。さて作者は翡翠に会えたのでしょうか。読みにまかせましょう。

私の感銘句

小西 瞬夏 選

足跡の膨らんでをり春の雪

前田 宏

少しぬかるんだ地面についた足跡か。まだ雪が少し残っているのかもしれない。それが「膨らんで」いるととらえる俳人の目。少しずつ暖かくなつて、膨らんでくるものは木の芽であったり、眠りから覚める動物たちであったり、春の空気であったり、何より作者の心情なのだろうと、読者の心もほつこりと膨らむ。

天高しあやつり人形糸を切る

万波 照世

あやつり人形の糸が、まるで天から垂れているようだ。自分自身も大いなるものに操られているように感じることもある。その糸を断ち切つて、人形も作者も、自分の意志で自由に動き出す。その世界はとてつもなく広い。困難もあるが「切る」という言い切りに、決意のようなものにじむ。

心臓の近きところで抱く子猫

三宅 章文

子猫を愛おしうに抱くしぐさを「心臓の近きところで」と描写した。この小さな子猫の命も、人間の命も、同じ生き物として同じようなリズムを刻んでいる。つい頭でつかちになりがちな人間も、からだは自然の一部であり、たくさん命とつながっていることに気づかせてくれる。

私の感銘句

前田 宏 選

日本晴の一品となる花菜漬

藤野屋ひろ

今ではあまり聞かなくなったお米の日本晴はあつさりとした口当たりで、京つけものである花菜漬との素朴な味わいを句にされた。ぱあつと明るい春のイメージとは違うが菜の花の蕾を塩漬にした苦みと塩味ににじみ出て来るようなちよつと切ない春らしさが香ってくるようです。

吊るし雛天井低き旧商家

藤原由美子

商家の玄関口は堂々とした佇まいであるが、一步裏にまわつて小僧や丁稚が住まう場所は大井も低く質素な暮らし向きであった。豪商は立派な緋毛氈のひな壇だけでなく、母親から一針縫われた雛や縁起物を縫いつけた吊るし雛も残されているのだ。句には平坦に詠まれているが当時の栄華盛衰にロマンを感じさせられる一句。

軒下の玉葱すでに十は落つ

天野 光暉

玉葱も収穫後は乾燥させるため数個ずつ結わえて軒下で乾燥させるのだが、玉葱の水分が多いためか黴がはえ、腐つて落ちてしまう。近年の異常気象が気がかりであるが、そんな自然と生活の中、機微に触れる作者の姿が見えるようである。

詠 家 諸

右手 采遊

友好を果たして鶴は秋天へ
散歩道思えば短い秋だった
詩に生きた人の訃報や秋夕焼
人混みへ消えゆく友の冬帽子
日常を病む時代かな焚火する

畦田 恵子

なだらかな稜線を追ふ袋掛
閃きは一瞬にして揚羽蝶
さはさとは村ごとあやす茂りかな
臍の緒のかたき連結落花生
埋火や肯定の文字探しをり

小川 房子

遠き日の子を打ちし悔い十二月
三月や卒業結婚六十年
朝夕に見て大男夏休み
音大へ行きたかった亡姉冬深し
兄弟姉みーんな逝けり春寒し

柏瀬眞理子

年玉のキティの袋離さぬ児
福寿草ぼつぼつ浮かぶ詩の欠片
青墨の滲み余寒の筆立てて
芝焼きの黒き土の香命の香
夕東風や猫の瞳は琥珀色

片岡 陽子

当節の今や百歳亀の鳴く
大噓フレイル一氣に吐き出せり
豆の花生命線の長きかな
建国日九十歳の太き指
春一番終の住処に半世紀

片山 千恵

詩心は遠く近くに探梅行
目白たち枝にバウンド二月かな
金星を左へ木星見て二月
雪解水はしる大山水路かな
二ん月や古希のスッピン姉だけに

加藤 正枝

手水舎の水に真紅の寒椿
湯豆腐の角くずれゆく結婚記念日
ドアプレートは「本日売り切れ」小春かな
手袋のリボン若き日のフィレンツェ
豆をまく卒寿の母の朗々と

岸本 順子

丸餅のプーと弾けり初笑ひ
乙巳の暁を解く大旦
凍星のひとつを胸に眠りつく
きさらぎの鏡に映る吐息かな
柳絮とぶ恋に芽生える夢二館

木村ゆきこ

寒夕焼この世の端にいるような
春驟雨北斎のように橋渡る
陽炎の芯となりたるロダン像
シュレッターときどき軋む花の昼
肩巾を振る黒日売桃の咲く吉備路

國富 柿方

峠のカフェ珈琲うまき野菊晴
露を来て吉備路の塔のゆるぎなし
秋蝶や舫い船の軋む音
ペン牀をかざし江戸の長火鉢
摩天楼より紙ヒコークキ春隣

國富 節子

袴の蔵に残りて世阿弥の忌
菊月の威風田中鏡獅子
そやされし時もありけり破蓮
インパールの祖父の日記の余寒かな
菜園の一步一步の霜柱

清中 蒼風

画像に來し方おもふ初鏡
暁闇の天狼猫と仰ぎ見る
朝風にきらめく銀杏落葉かな
四温なき寒の大气が身を責める
立春と思へど今朝のこの外氣

詠 近 家 諸

倉見 雲匝

青い目の男の子も混り雛流し

県境の赤痢の墓石冬紅葉

宙の闇年中背負う春の月

母投げる叱言さけつつ毛糸巻く

左手の中の右手や氷柱伸ぶ

黒瀬 琢葉

七日粥犬のかぐりしガラス窓

ひらがなで語る哲学春の星

真実を告げたる人の声涼し

筆洗ふ薄墨色の十三夜

炬燵ではいごいごするなと婆の声

小峠 幸枝

「神前に礼」道場に鏡餅

菩提寺の灯りとなりて雪椿

讃歌ともレクイエムとも蟬時雨

鍵穴をするりと鍵の月今宵

瘡蓋の色濃くなりて冬に入る

小西 瞬夏

春の風否いにしへのひとのこゑ

素数あり一途に子子生まれけり

いちまいの鱗をひろふ夏の果

曼珠沙華昼の密度となりけり

東口出て冬薔薇を抱きなほす

小松原陽子

野分晴一時帰郷の鏡獅子

流れ星スマホ操作のネイル先

神帰月少し戸が開き能舞台

冬紅葉J-1昇格ファジアーノ

鳴釜や太く鳴るなる雪催

佐藤 千恵

夜桜やちよつと酸っぱいジンフィーズ

今生を浄め白蓮白深む

指切りは効いていますか螢草

古き文また古びゆく秋日和

荒星のひとつ何かを語るかに

新会員候補者推薦のお願い

新会員候補者は、会員各位の個人推薦により選出されることになります。

会員のみなさまの周辺に、協会員に相応しい方がおられましたら、所定の「入会申込書」により、是非、ご推薦くださるようお願いいたします。

現代俳句協会

列島春秋 地区別現代俳句歳時記

二〇二五年掲載

一月

諦観と安堵の雑煮碗二つ

秋岡 宣子

二月 幕末期の備中松山藩土山田方谷

開け放つ方谷庵や梅真白

前田 宏

三月

流れゆくものに月日や雛の旅

右手 采遊

四月

蔵町の屋号覚えし初つばめ

土屋 鋭喜

五月

永忠を語る石塀檜若葉

万波 照世

六月

一叢の著莪や源平古戦場

清中 蒼風

七月

水蒼き後楽園や夏の鴨

柏瀬眞理子

八月

八月やひたすら走る絹枝像

橋本 幹夫

九月

雨あがる鉄路の匂ひ葛の花

三宅 章文

一〇月

秋天を羽織る矢掛の大名行列

國富 節子

十一月

隠岐を向く女御の墓や萩の風

四宮 和美

十二月

寒柝のひとときわ高し父が来る

小西 邦子

令和七年度 総会のご案内

日時 令和七年四月十九日（土）
十一時～十五時

会場 岡山県ゆうあいセンター
（きらめきプラザ） 大会議室一、二

岡山市北区南方二丁目十三ー一
（旧国立病院跡） 駐車場有り

会費 二千元（昼食費、会場費、その他）

議事

- ①令和六年度事業報告・会計報告
- ②会計監査報告
- ③役員改選
- ④令和七年度事業計画案・予算案
- ⑤その他

報告・連絡事項

- ①新会員の紹介
- ②第四十三回中国地区現代俳句大会
- ③その他

◇総会終了後、持ち寄り「ミニ句会」を開きます。（雑詠二句）

第四十三回 中国地区現代俳句大会ご案内

とき 令和七年六月二十二日（日）

紙上大会（広島県）

第六十二回 現代俳句全国大会

とき 令和七年十一月三日（祝・月）
ところ 東京都

令和七年度 行事予定

○総会

四月十九日（土）
岡山県ゆうあいセンター

○第三十回現代俳句大会

十月十三日（月）（予定）
岡山県ゆうあいセンター

○第二十六回吟行会

十一月九日（日）
庭瀬（岡山市）

句会場 岡山市立吉備公民館

○おかやま現俳句会

6（日）・9（月）・12（月） 0時投句締切
岡山県ゆうあいセンター

会員の活躍

◇難波 正夫

第61回現代俳句協会全国大会

特別選者特選 星野高士選

秀逸賞

セーターに頭を入れるとき不安

◇中野 澄子

第56回市民の文芸（岡山市）

市長賞

みどり児を丸ごとあらふ春の風

◇小西 瞬夏

令和6年度 第32回西東三鬼賞

入選

愛し合ふことに力や檸檬に刃

事務局・編集部だより

▽第二十九回岡山県現代俳句大会、第二十五回を数える吟行会、九月、十二月、三月のおかやま現俳句会と年度の後半が中心の行事も毎回多くの参加者が集まり、吟行会、句会においては結社、協会を越えた参加者もおられ交流と研鑽の場となりました。それもひとえに参加頂いた会員のみなさまのご協力により盛況に終えることが出来ました。感謝申し上げます。

▽会報五十七号をお届けします。ご多用中、原稿にご協力有難うございました。（前田 宏）

▽令和七年度会費の振込用紙を同封しました。よろしく願います。

前年度分まで未納の方は合わせてお振り込みをお願いします。（薄 和子）

会報他受贈深謝

各県、各地区より会報、句集等、贈呈いただき有難くお礼申し上げます。

現代俳句岡山・第五十七号

令和七年三月三十一日発行

発行責任者 木村ゆきこ

発行所 岡山県現代俳句協会

編集人 前田 宏

事務局

☎七九一三〇三

新見市大佐小阪部二三九〇 西田方

携帯〇七〇・五六七二八〇四一